Aug. 26 / 14:45-16:15 / AN321

AI とデジタル教材を活用した具体的で再現可能なリスニング指導モデル

Ueda, Marisa (Ritsumeikan U.)

本シンポジウムは、学会テーマ「応用言語学が結ぶ国際交流―理論・評価・実践の未来」に即し、AI とデジタル教材を活用した具体的で再現可能なリスニング指導モデルを提示します。日本語はもちろんのこと、言語の種類が異なれど、国際的な交流は相手の話を「聞く」ことから始まりますが、日本の英語学習者にとって、リスニングは 4 技能の中で最難関の技術です。リスニングはリーディングやスピーキングに比べて体系的指導の共有が進みにくく、教員が自身の経験則に依存しやすいのが現実です。そこで本シンポジウムでは、まず第一に、<① 音素知覚、② 語彙・統語、③ 意味処理>の段階モデルやメタ認知的方略研究、リスニング方略の種類と説明を紹介します。その中で、「学習者がどの段階でつまづくのか」、つまり、学習者の理解が崩れるポイント（例：音の連結・弱形・語境界など）を授業で可視化する指導法を提起します。具体的には、デジタル教材を活用して学習者の弱点を同定する短時間タスクや内省（次回への計画)、教員の評価・指導方法を説明します。また、学習者と教員双方の目標設定についても紹介します。最後に、AI を活用し、学習者の習熟度に適した教材作成の具体的な実践例を紹介します。例えば、ディクテーション／穴埋め（虫食い）問題や語境界トレーニング、要点把握、推測の訓練などを紹介します。発表は①理論と到達目標、②デジタル教材を活用した指導法 ③ AI を活用した指導法、を順次発表し、最後に参加者を交えて、AI 活用の倫理・公平性（著作権、個人情報、過度依存）と、授業研究・国際比較研究へ発展させる評価指標やデータ共有の意義を討議する。日本での実践知を国際的知見と接続し、リスニング研究者から発信する応用言語学を通しての国際交流を広げる契機としたい。

Aug. 26 / 14:45-16:15 / AN325

これからの大学英語教育―学際的協同が拓く新たな可能性

Kawahara, Koji (Nagoya U. of Foreign Studies); Sasao, Yosuke (Kyoto U.); Kanamaru, Toshiyuki (Kyoto U.)

本シンポジウム「これからの大学英語教育―学際的協同が拓く新たな可能性」は，大学英語教育が直面する課題として，(1)学習者の多様化と到達目標の再定義，(2)語彙・文法知識の精密な診断と指導設計，(3)生成 AI の急速な普及に伴う学習・評価の変容について考察するため，理論言語学・語彙研究・生成 AI 研究の協同により統合的に議論する。川原功司（名古屋外国語大学）は生成文法に基づく第二言語習得研究（GenSLA）を概観し，UG による制約という観点から，英語教育に応用可能な現象を整理し，その知見が教材・明示的指導へ部分的に応用可能であることを示す。笹尾洋介（京都大学）は，大規模言語モデルを用いて日本人学習者にとっての語彙難易度を推定する試みを報告し，GPT-4o を語彙テストの Rasch 難易度データで調整することで，高精度に難易度を予測でき，語彙学習・カリキュラム設計・教材開発・評価に資する可能性を提示する。金丸敏幸（京都大学）は，生成 AI 時代における英語力を「AI と協働して産出・理解する能力」へ拡張して捉え直し，教員の役割が指導者から学習ファシリテータへ移行すること，学習者の自律性・自己評価・メタ認知方略を育てる枠組みの必要性を論じる。3 人の発表者に加え，指定討論者の寺内一（高千穂大学）がコメントし，総合司会の内藤永（武蔵大学）がそれを架橋し，理論―測定―実践を往還する授業設計と，生成 AI を前提とした大学英語教育の将来像（学習支援・評価・教員研修）を会場とともに検討する。これに加えて，本シンポジウムでは田地野彰（名古屋外国語大学）による論点整理を踏まえ，(1)理論知（GenSLA） に基づく指導項目の選定，(2)測定による語彙・文法の診断と教材最適化，(3)生成 AI 活用下での課題設計・評価（真正性・学習者主体性・不正対策）の具体案を探っていく. 各発表 25 分+討論 25 分を基本とし, 研究成果を授業実践へ落とし込む指針をフロアと共有していきたい。

Aug. 26 / 14:45-16:15 / AC345

“-ING Form”の眞の理解と適切な文法記述をめぐって

Ohmori, Yujitsu (Aichi U.); Imai, Takao (Nanzan U.); Uchida, Masaichi (Ohka Gakuen U.)

第一発表（大森）「機能主義的観点からの-ING 考」

学習英語文法における《-ING》の扱いは伝統的品詞論（ラテン文法 8 品詞分類及び R ラウスや L マレーの規範文法 9 品詞分類）に基づき「動名詞」と「現在分詞」という別々のカテゴリーとして文法記述が行われるが、それが中級学習者においても《-ING》の理解と適切な使用法に関して混乱を招いている。もっとも、伝統文法の枠組でも Zandvoort (1957) のように Gerund と Present Participle を同じ項目内で扱うものもあり、実用主義文法の枠組で Close (1962) のように To-infinite と-ING を同列に扱うものもある。大学レベルの学習者が備えるべき《-ING》の文法知識を整理し、機能主義的視点から「不定詞」の用法と並列的記述を提案する。

第二発表（今井）「認知言語学的観点からの-ING 考」

本発表では、認知言語学の基本概念を参照しながら《-ING》について考察する。「言語における事実とは、実際に使われている表現であり、仮説とは学者が作った文法理論である」という前提を基本的スタンスとするため、ここで提示する内容も《-ING》という実際に使われている表現に基づき、スキーマ化したひとつの仮説であると考える。《-ING》は Langacker のグラウンディング理論において、グラウンド化されていない進行相という type であり、そこには「途中」というイメージがコアとして存在する。また、フレーム知識として、単純相や完了相という type が関連することから考察を行う。

第三発表（内田）「実用主義的文法観からの-ING 構文考」

英語における《-ING》の文法記述には、統語的・意味的・機能的側面を含む様々な範囲が存在する。本発表では、英語における「現在分詞」の機能に焦点を当て、とりわけ英語の「分詞構文」を取り上げ、議論を展開することにする。《-ING》の基本的な特徴の一つに同時動作が挙げられるが、「分詞構文」における同時動作の解釈と結果的解釈の関係性について掘り下げてみたい。その上で、英語教育における「分詞構文」の文法的指導についても検討する。

Aug. 26 / 14:45-16:15 / AS361

大学英語教育におけるクリティカル・リーディング教材としてのオーセンティックな文学テクストの可能性

Tanaka, Mayumi (Mukogawa Women’s U.); Fukumoto, Yukiko (Mukogawa Women’s U.); Matsubara, Yoko (Mukogawa Women’s U.)

本シンポジウムでは、批判的応用言語学に基づくクリティカル・リーディングの指導における、オーセンティックな英語文学テクストの教材としての可能性を検討する。批判的応用言語学は、言語と権力、イデオロギー、社会的不平等との関係を批判的に検討する学問分野である。この視点に立ち、英語教育学、英語圏児童文学、アメリカ文学を専門とする教員 3 名が協働し、大学生を対象としたクリティカル・リーディング教材の開発に取り組んでいる。本研究では、今日まで広く読み継がれてきた英語圏文学の古典的作品 3 編 “The Secret Garden”（Burnett, 1911）、“Rip Van Winkle” の子ども向け翻案版（Lang & Lang, 1913）、および “The Story of an Hour”（Chopin, 1894）を取り上げ、社会文化的視点からテクストを批判的に読むための教科書およびワークブックを作成した。これらはいずれも学習者向けに単純化された教材ではなく、作品成立当時の社会背景や文化的価値観、言語表現を内包しているため、英語教育における扱い方そのものが検討の対象となる。本シンポジウムでは、まず研究の理論的背景と、クリティカル・リーディングを行う英語リーディング科目のカリキュラム上の位置づけを説明する。次に、文学研究の観点から “The Secret Garden” を用いた教材の設計とねらいを紹介し、続いて “Rip Van Winkle” および “The Story of an Hour” を扱った教材について検討する。さらに、学生アンケートの結果を共有し、開発した

教材が学習者にどのように受け止められているのかを考察する。最後に、英語教育においてオーセンティックな英語文学テクストをクリティカル・リーディングで用いることの意義と課題について、参加者とともに議論したい。

Aug. 28 / 10:20-11:50 / AC337

主体的に話せる話者の育成—学習者の agency に配慮したやりとりの習得支援を考える

Otani, Mami (Kyoto Women's U.); Osuka, Naoko (Meiji U.); Miura, Aika (Rikkyo U.); Iwata, Yuko (Meiji U.); Otsuka, Yoko (Gifu Shotoku Gakuen U.)

外国語のコミュニケーション教育においては、文化背景が異なる相手と適切なやりとり（interaction）を行いながら意思疎通を図る能力の育成が重要だと指摘されている。なぜなら、私たちはやりとりを通じて自己を表現し、相手を理解し、相互理解を深めるからである。しかし、言語文化が異なれば、やりとりの方法も異なり、誤解が生じたり、意思疎通がうまくいかなかったりすることもしばしばである。したがって異文化間の会話では、会話の参加者双方が、自分の母語のやりとりのスタイルから一旦離れ、相手のスタイルに歩み寄ることが求められる。自分の母語と目標言語のやりとりの方法の違いを理解し、状況に応じて主体的に適切なやりとりを行える能力が重要なのである。しかし、やりとりの方法の背後にはその言語の文化価値があるため、学習者が、目標言語の文化価値を受容することに心理的抵抗を感じる場合もある。日本の英語教育では、このような学習者が主体的にコミュニケーションを行う能力を獲得するための支援がまだ十分とは言えないだろう。また学習者の agency への配慮も不足している。学習者は教師からの質問や与えられた課題には答えることができても、自ら話題を見出し、相手に歩み寄って適切なやりとりを行い、話題を管理する主体的な話し手になるまでには、ほとんど至っていない。そこで本シンポジウムでは、異なる言語や文化をもつ相手と主体的にやりとりができる話者を育てるために、どのような支援が可能かを考える。具体的には、学習者がコミュニケーションスタイルを主体的に学び合う実験的授業、英語と日本語の語用論的特徴の比較を通じた学びの試み、日本語教育におけるやりとり指導から得られる示唆などを紹介する。これらの実践の成果と課題を共有し、フロアとの議論を通して、よりよいコミュニケーション支援のあり方を探りたい。